

琉球大学学術リポジトリ

2007-2011

日本・ベトナム共同授業研究会の歩み ～自己の尊
厳・地域の尊厳から、「子ども中心主義」を問い返
す～

メタデータ	言語: 出版者: 村上呂里 公開日: 2012-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 呂里, 西岡, 尚也, 善元, 幸夫, 那須, 泉, Ta Van Thong, Dao Thi Van, Nguyen Thi Nhung, Tran Thi Loan, Murakami, Rori, Nishioka, Naoya, Yoshimoto, Yukio, Nasu, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24032

クックドゥオン小学校の校庭にて集合写真





クックドゥオン小学校の校門付近と校庭





Loan校長とOanh副校長、タイグエン師範大学Nhung先生といっしょに



上 ベトナム語の授業 ・ 下 地理の授業での話し合い





上 善元先生の授業にて ・ 下 西岡先生の授業にて



目次

- 沖縄とベトナム少数民族地域との共同授業研究 … 1~7 頁
— 自己の尊厳・地域の尊厳から「子ども中心主義」を問い返す— 村上呂里
- 第 I 部 第1回☆共同授業研究会 in 沖縄** … 9~33 頁
～沖縄古典文学・オモロ歌謡の群読を試みた授業をめぐる～
- ◇単元構想と学習指導案および授業の実際 村上呂里
◇授業研究会の記録
- 第 II 部 第2回☆共同授業研究会 in ベトナム・クックドゥオン小学校**
(第 1 回) 2009年12月27日 … 35-67 頁
- ◇第1時間目 ベトナム語(1年生) 授業者 Dao Thi Thao
◇第2時間目 地理「南ベトナムの民族」(4年生) 授業者 Dinh Thi Minh Hoa
◇第3時間目 地理「世界地図」 授業者 西岡尚也/通訳 那須 泉
*この授業に関しては、第IV部論文編所収西岡論文を参照されたい。
- ◇第4時間目 「太陽と山に住む人たち(1)」(4年生)
授業者 善元幸夫/通訳 那須 泉
- ◇授業研究会の記録
(第 2 回) 2010年 9月 8日 … 68-97 頁
- ◇第1時間目 「世界の食べ物」(2年生) 授業者 西岡尚也/通訳 那須 泉
◇第2時間目 「太陽と山に住む人たち(2)」(5年生)
授業者 善元幸夫/通訳 那須 泉
- ◇授業研究会の記録

第III部 ベトナム人による日本の小学校と授業に対する考察 … 99-139 頁

◇外国人生徒に対する善元幸夫先生の日本語教育に関する考察

Ta Van Thong (ベトナム百科事典学院)

◇善元幸夫先生の授業を生き生きと魅力的にしているものは何か

Dao Thi Van (タイグエン師範大学)

◇善元幸夫教諭の授業を参観して

Nguyen Thi Nhung (タイグエン師範大学)

◇東京の親愛なる学校

Nguyen Thi Nhung (タイグエン師範大学)

◇琉球大学附属小学校に対する私の印象記

Tran Thi Loan (クックドゥオン小学校)

第IV部 考察 … 141-171 頁

◇「内なる国際化」が進む日本社会と識字教育－今後の国際理解教育のあり方を考える－

西岡尚也

◇多文化共生教育としての世界地図学習の役割

－ベトナム・クックドゥオン小学校における公開授業からの考察－

西岡尚也

◇「善元幸夫『太陽と山に住む人たち』について～ドキュメント風に～」

村上呂里

◇ 漕ぎだそう、うちなあじあ^{うなぼら}の海原^こへ

－沖縄発・多言語多文化共生教育の創造を

村上呂里

* 本研究の通訳と翻訳の一切は、那須 泉が監修し、行っている。



地理の時間に、沖縄の紅型衣装の写真を紹介するHoa先生

沖縄とベトナム少数民族地域との共同授業研究

—自己の尊厳・地域の尊厳から「子ども中心主義」を問い返す—

村上呂里

はじめに一研究の目的と背景

54 民族（多数民族キン族が約 86 %、少数民族が約 14 %）からなる多民族国家ベトナムは、1945 年独立国家樹立以降、少数民族の言語と文化の尊厳の保障を憲法で掲げてきた。母語（民族語）文化の継承発展と普通語（ベトナム語）習得を両立させるバイリンガル教育の展望を、現在に至るまで失敗を重ねながらも模索しつづけている。その失敗と模索の過程から、公教育において原則として「国語」モノリンガル教育政策を採りつづけている日本が学ぶべき点は大きい。（拙著『日本・ベトナム比較言語教育史』（明石書店、2008 年）を参照されたい。）

一方、実際の授業の場面では、今も「権威的な教師」像のもと「典型的な教師主導型の授業」（田中義隆『ベトナムの教育改革—「子ども中心主義」の教育は実現したのか』明石書店、2008 年）が行われ、「成績の良い児童ばかりが発言の機会を与えられ、このテンポについていけない児童はつまずきを取り返すことができなくなる傾向にある」（坪井未来子「ベトナムの教育の現況」、今井昭夫監訳・ファン・ゴク・リエン著『ベトナムの歴史』（明石書店、2008 年）所収）現状を目の辺りにすることが多い。授業についていけず、教室のなかで自尊心を持ってないでいる児童を見て、心痛むことがあった。自らの言語文化を否定され、地域の尊厳が保障されず、「学力の低さ」が問題化されつづけてきた沖縄の言語教育体験から研究を出発させた筆者らは、こうした「授業」のあり方では「普通語」であるベトナム語を母語とする多数民族キン（京）族と、民族語を土壌とする少数民族の子どもたちの間で学力格差が広がり、貧困や遠隔地通学という困難をのりこえてまで就学したくなくなる児童が生まれるのは必然ではないかとの思いを強く持った。そして「授業」のなかでこそ子どもたちの尊厳が大切にされることを願い、「授業」の場を共有しながら共同研究を行うことを願うようになった。

折しもベトナムでは 2005 年教育法改訂を契機とし、「子ども中心主義」（ベトナム語では、**lam hoc sinh trung tam** : 漢越語（中国語由来のベトナム語）を直訳すると「学生（注

高校生以下の児童・生徒の呼称) 中心主義」となる) という用語が、教育関係者の間で盛んに用いられるようになってきている。しかしその内実は、前掲田中(2008)が指摘するように競争的ゲームの導入による活性化など多分に表層的であり、授業中も新しい教授法を説く指導書ばかりを見て、「子どもを見ていない」場合が多い。教育法改訂を機にこのように模索するベトナム人教員・研究者にとっても、「授業」の場を共有し、「子ども中心主義」の内実を共に豊かにしていく共同授業研究の試みは望むところともなった。

ベトナム教育改革の動向について述べた先行研究としては、潮木守一編『ベトナムにおける初等教育の普遍化政策』(明石書店、2008年)がある。初等教育政策を踏まえ、各省(県に相当)教育局に対するアンケート調査やインタビュー調査を行い、就学率、地域間格差、カリキュラム改革の動向などを明らかにしている。この中で潮木「ベトナム初等教育の現状と課題」は、貧困や僻地等の困難を抱えた「少数民族の児童」への初等教育普及、中でも「言語政策と初等教育での言語教育」の課題が切実であることを指摘している。また同書所収・浜野隆「ベトナムの初等教育政策と財政的基盤」は、カリキュラム改革において「児童中心の教授法」が推進され、知識伝達型から学習者主体の教授法への転換による教育の質的向上およびそれを担う教員養成の質的向上が目標とされていることを指摘し、財政的基盤の観点からの検証を試みている。前掲田中(2008)は、教育開発コンサルタントという立場から多くのベトナムの授業を参観し、「子ども中心主義」の教育改革について実際に「授業」を参観し、それが未だ表層的なものであることを具体的に指摘している。

本研究は、これらの検証や指摘に学び、経済格差(貧困)、「言語問題」、「学力問題」、アイデンティティや差別偏見をめぐる葛藤等さまざまな矛盾と困難が集約されたベトナム北部山岳少数民族地域をフィールドとし、同様の困難な課題を抱えた沖縄の教育史体験に基づきながら、地域間共同研究という立場から対話的相互的な授業研究交流を行い、ボトムアップ的に双方の教育改革の質的向上に参加することをめざしている。

ベトナムとの共同授業研究は、沖縄の「学力問題」の「問題」の所在と展望をより多層的に照らし出すことにもなろう。本研究は、「学力問題」が問題化されている沖縄のある僻地離島地域の小学校における授業研究の取り組みとも連動させ、グローバル化時代における「学力問題」の「問題」の所在と展望について、国境を越えた地域間共同によって多層的に探究することも最終的な目的としている。

以上のような課題意識のもと、2007年度から2011年度にかけ、つぎのような提案授業

とそれに関する共同授業研究を行ってきた。

- ◇ 沖縄古典文学・オモロ歌謡の群読を試みた授業
- ◇ 新宿区立大久保小学校日本語国際学級（善元幸夫）の授業
- ◇ ベトナムタイグエン省クックドゥオン小学校における授業
 - (1) Dang Thi Thao 「ベトナム語」の授業
 - (2) Dinh Thi Minh Hoa 「地理」の授業
 - (3) 西岡尚也「地理」の授業
 - (4) 善元幸夫・総合単元「太陽と山に住む人たち（１）（２）」

本報告書では、これらの授業および共同授業研究会の記録とその考察を報告することとする。

ベトナム教育改革の動向

共同授業研究について述べる前に、ベトナム教育改革の具体について、少数民族に対する教育という観点から見ていくこととする。

1998年の教育法では、以下のような条項が新たに定められた。

第7条 学校およびその他の教育施設において使用される言語について

—少数民族の会話・読み書きの教授・学習、外国語教授

1. 学校およびその他の教育施設において使用される正式な言語はベトナム語とする。(以下略)
2. 国家は、少数民族が自らの民族語の会話・読み書きの学習が可能な条件を創造する。これは、少数民族の文化本質の保持と発展をねらいとし、少数民族児童生徒が学校およびその他の教育施設で学習する際に見識を吸収することを容易とするためである。(以下略。 下線 村上)

学校における正式な言語を「ベトナム語」として規定し、国民形成におけるベトナム語の位置を強化するとともに、国家の側の民族語学習の条件整備についても明記している。建国以来の課題であった少数民族に対するベトナム語教育を、今日の産業主義社会化の流れの中でいっそう重視していることがうかがえる改訂である。すなわち少数民族の感情に

配慮し、言語の権利に留意しつつ、ベトナム語学習をより強化することをねらった条項といえよう。

2005年の教育法改訂においては、これまでの一斉注入・教師主導型授業を改め、グループ学習やゲームを位置づけ、学習者を積極的に授業に参加させる方向を強く打ち出された。それに関わる条項をあげる。

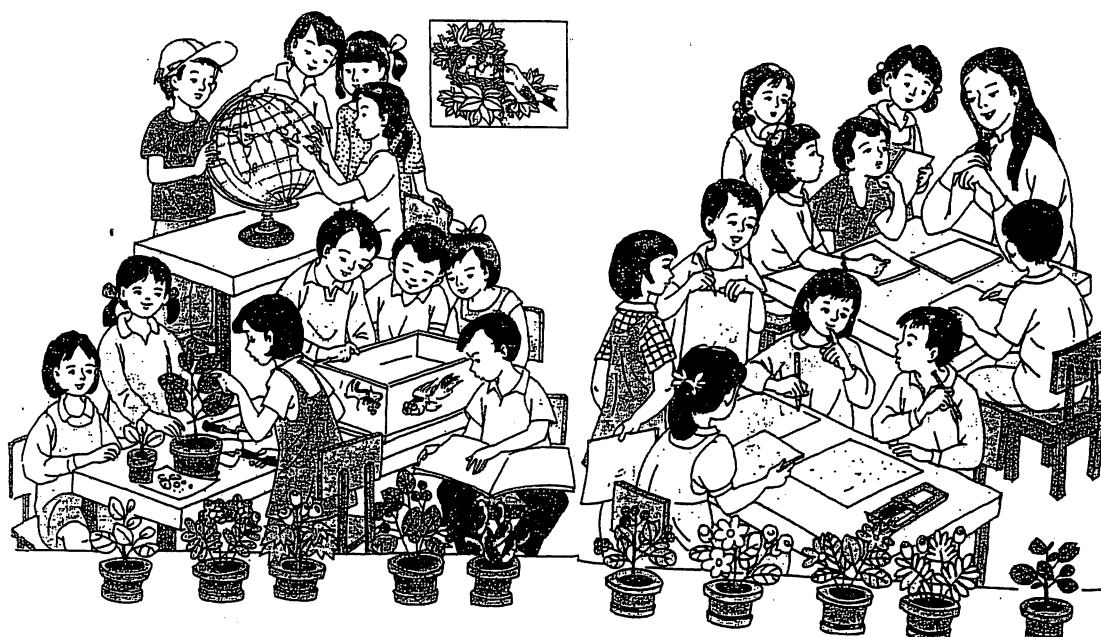
第5条 教育方法とその内容の指針

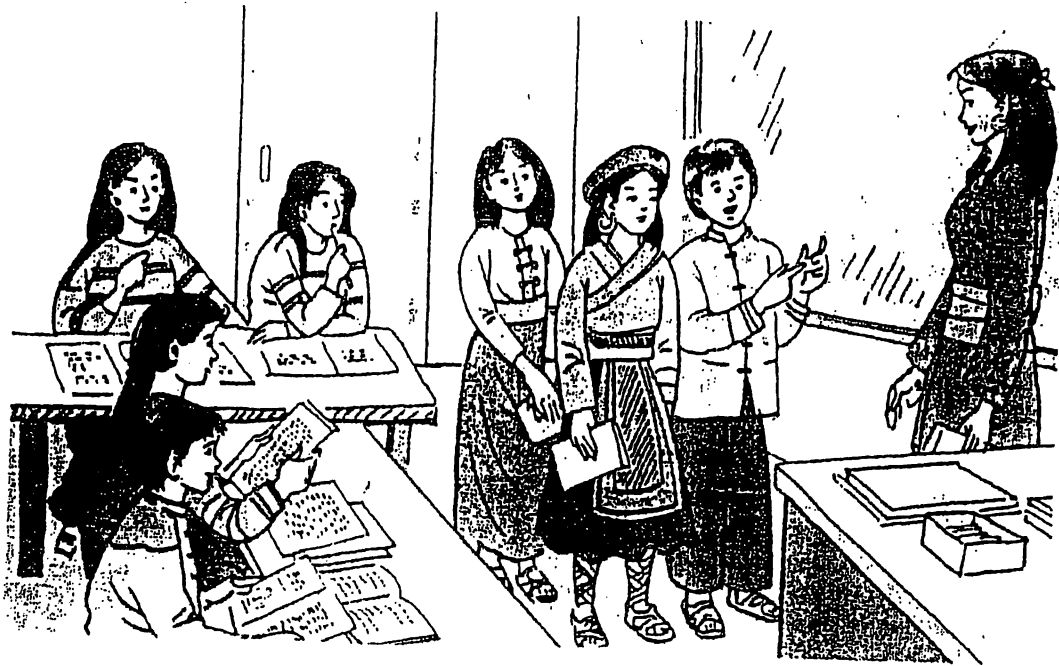
2. 生徒の積極性・自主性・主体性・創造力が発揮されて、自ら学び行動することによって、学習への興味と意欲が湧くような教育方法を取らなければならない。

第28条 普通教育の内容および方法についての要求

2. 普通教育の方法は、生徒の積極性、自主性、主体性、創造性を発揮させなければならない。すなわち、それぞれのクラス、科目の特徴に適し、グループでの作業の可能性・自学方法を保証し、実践における知識の活用能力を訓練し、感性に働きかけて楽しみをもたらし、学生に学習の興味を湧かせることである。

学習者の「積極性、自主性、主体性、創造性」と「興味と意欲」が強調され、グループ学習や感性に働きかけたり、「活用」能力を実践的に訓練したりする学習方法が奨励されるようになったのである。こうした教育改革の動向は、たとえば小学校「ベトナム語」教科書（1年生下巻、44-45頁）のつぎのようなさし絵にも表されている。





また、小学校教員養成学部学生用に自主編成された Tran Ba Hoanh「小学校課程における積極的学びの実践」(ハノイ師範大学)においてもつぎのようなさし絵(次頁)が見られる。教室の机が一斉授業ではない位置に工夫され、学生たちがグループで話し合ったり、教室の前で発表したりしている様子である。

教育法改訂前に出された Nguyen Chi『新教育カリキュラムに沿った小学校課程のベトナム語の授業』(教育出版社、2003年)中には「ベトナム語教授法のドイモイ(刷新)」という項目があり、「コミュニケーションのためのベトナム語使用をめざした教育」「家庭・学校・社会の中で生活に直結したベトナム語教育」「生徒の積極性を引き出すための教授法」「場面を設定して学ぶ方法」「グループ討論を導入する方法」「ゲームを導入する方法」などが掲げられている。

ベトナムは、未だ産業主義社会をめざす発展途上国であるが、効率の良い一斉注入式の「東アジア型の教育」からの脱却を志向しているということになる。

少数民族地域の小学校教育をフィールドとして考えるとき、教育法改訂における①少数民族言語教育の強化と、②知識注入型(「教え」)から学習者主体の学習(「学び」)観への転換の方向性の提示とは、密接に関わり合っていると考えられる。

今日の少数民族地域における言語教育政策で重要な位置を占めるハノイ国家大学教授の Tran Tri Doi は、2004年に出版された書の中で、「少数民族の中に現代の高度な要求に応えうる労働力を育て」「山岳民族社会の安定的な経済発展計画を実現させる」言語教育事業に対する具体的な提言を行っている(『北部3省山岳民族地域における言語教育の実態』(ハノイ国家大学出版社、2004年)。この教育法改訂においても、「現代の高度な要求に応えうる労働力」として少数民族の子どもたちを育成するねらいを見ることができよう。すなわちコミュニケーションのためのベトナム語能力を獲得させることを通して、産業主義社会を担う人材に育成しようとするねらいである。

授業観の転換は、ベトナムの教育について意義深い。その転換が真に少数民族が主体として自らの地域を切り拓いていく力の育成につながりうるのか、それとも政府が望む「現代の高度な要求に応えうる労働力」としての育成のためにとどまるものとなっていくのか、問われるところであろう。表層的な教育法ととどまるのか、それとも学習者中心主義、子ども中心主義として根づき、地域を切り拓く民主主義をにないうる人材育成へとつながりゆくか、その行方に参加しながら、注視をしていきたい。

おわりに

本研究は、以上のようなベトナムの教育動向を踏まえながら、「子ども中心主義」の実践家として名を知られ、多言語多文化教育を新宿大久保で実践してきた善元幸夫（前新宿区立大久保小学校日本語国際学級教諭・現琉球大学および立教大学非常勤講師）に途中から共同研究者として加わっていただき、質的な深まりを見せた。

今なお基地問題を背負わされる政治的差別構造の一方で、独自の文化を発展的創造的に伝承しつづける沖縄地域と、多言語多文化地域としての新宿大久保と、理念として少数民族の言語と文化の権利を掲げつづけてきたベトナムと、3つの地域の教育体験と知が対話的相互的に出会いながら、共に「子ども中心主義」の内実を自己の尊厳、地域の尊厳の視点からどのように深めうるか、それが「学力問題」をどうひらきうるのか、本共同授業研究会は緒に就いたばかりといえる。しかしながら、ひとまず4年間の成果と到達点を踏まえ、次なるスタートを切りたいという思いから、授業研究会の歩みを報告書として作成することとした。

忌憚ないご意見を賜ることができれば、幸甚この上ないことである。

